様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　14　日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９４０
研究課題名（和文）　「ことばによる応答理論」に基づいた家庭科のふれあい体験学習の開発
研究課題名（英文）　DEVELOPMENT OF THE HOMEMAKING LESSONS ON COMMUNICATION WITH STUDENTS AND INFANTS BASED ON THE VERBAL REPLYING THEORY
研究代表者
柴　静子　（　SHIBA SHIZUKO　）
広島大学・大学院教育学研究科･教授
研究者番号：９０１４１７７０

研究成果の概要（和文）：家庭科で一般的に実践されてきた「乳幼児とのふれあい体験学習」を改善・向上させるために，「ことばによる応答理論」を基盤として「絵本」，と「途上国理解」という要素を組み込んだ新しいプログラムを構築し，授業実践を通してその効果について検証すること，並びにその効果が示されたときは，学校現場や途上国援助を行っているボランティア団体に普及することを設定した。プログラム･モデルを理論的に作成し、広島大学附属中学校･高等学校で授業実践して検証したところ、高い学習効果が示されたため、今後、教育現場への幅広い普及が望まれる。
研究成果の概要（英文）：Based on the verbal replying theory, I developed an innovative program for “experience learning of contact with young children”, which is one of the family and consumer sciences areas. In this program, the following learning activities were involved; “making a picture book” and “understanding of children living in the developing countries”. Through the lesson practice in the junior high school and high school attached to Hiroshima University and the evaluation, I intended to find out the effectiveness of this program. As a result, this program brought about the remarkable effect. I expect to popularize this program among not only the classrooms but also voluntary bodies in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学･教科教育学
キーワード：家庭科、ふれあい体験学習、ことばによる応答理論、絵本製作、モン族

１．研究開始当初の背景

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第４期）は，2007 年 11 月に「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を公表した。「審議のまとめ」においては，少子高齢社会の到来や環境問題の深刻化などから，小学校から高等学校に至るまでの家庭科教育の重要性がより強く謳われている。とりわけ，家庭科の学習指導要領改善の基本方針として，「少子高齢化や家庭の機能が充分に果たされていないといった状況に対応し，家族と家庭に関する教育と子育て理解のための体験や高齢者との交流を重視する」ことがあげられた。

以上の基本方針と軌を同一にして，申請者は平成 16～19 年度の４ヵ年にわたり，乳幼児とのふれあい体験学習の深化と効率化に向けて学部・附属学校共同研究を進展させて

きた。平成 18 年度には，ふれあい体験学習の一環として実施されている絵本の製作指導に焦点を当てて，「指導理念や方法の改善により，一層の学習効果がもたらされる」という仮説を立て，授業実践を行い，それを実証した。具体的には，附属福山高等学校でのふれあい実体験(ももやま保育園訪問)と附属高等学校でのふれあい擬似体験学習の中で，０歳児向けの紙絵本（統制群）と布絵本（実験群）の製作を行わせ，長所と隘路を明らかにすることによって，この領域の学習の質的向上に寄与することができ，また幾つかの課題を見出すことができた。それらの課題の一つは，子どもの文化として絵本がもつ普遍的価値をどのように生徒に理解させるか，ということであった。

そこで平成 19 年度は，絵本製作学習の一環として，戦後日本の子ども文化と現在の発展途上国の子ども文化とを繋いで考えさせるという新しい内容を導入することによって，絵本の普遍的価値への理解を促すことが可能になるという仮説を立てた。カンボジアが端的な例だが，途上国の子どもたちは，保育や幼児教育の機会を充分に与えられておらず，また与えられているとしても，保育指導の理論・方法の欠如や保育環境上の問題から，成長発達を保証する質の高い教育を受けていない。このような事情は日本の敗戦直後との状況と極めて類似している。

日本のかつての経験と途上国の現在を繋ぐ学習を絵本製作学習の中に位置づけようとする場合，どのように内容を構成すれば，日本文化の利点を理解し，また途上国の人々に共感して援助の気持ちをもつ将来の国際人の育成に寄与することができるのであろうか。このような視角から，二つの附属高等学校において，絵本を通して日本の文化と発展途上国の子どもを理解する授業を構築・実践し，検証し，その効果を確信した。

以上の研究過程から，絵本を媒介としたふれあい体験学習をとおして，中学生・高校生と幼児との間には，自ずから「ことばによるコミュニケーション」が成立することは実感できたが，このようなコミュニケーションの理論や能率的な習得の方法をどのように指導すればよいのかについていては，さらに研究を積まねばならならないことが明白になった。そこで，幾多の文献等を検討した結果，宮原和子氏らが主唱する，乳幼児の「環境（もの）との応答」，「心の応答」そして「ことばによる応答」を基盤とした「知的好奇心を育てる応答的保育理論」の秀逸性に着目した。

とりわけ「ことばによる応答理論」は，言語コミュニケーションのスキルを育成する必要性に迫られている家庭科にとって，他の理論の追随を許さないほど適用可能なものと思われた。加えて，発展途上国のこどもたちに対しても，「絵本」と「ことばによる応答理論」の２つの強力なツールを組み込んだ学習プログラムを提示することができると考えた。このようなことから，本研究の眼目を，「ことばによる応答理論」に基づいた家庭科のふれあい体験学習のプログラム開発とした。さらに、この中に，途上国のこどもたちを理解して援助する精神を啓培し，援助の方法を考えることのできる人間の育成を組み込むことの可能性も追求したいと考えた。

２．研究の目的

研究期間中に明らかにしたいこととして，家庭科で一般的に実践されてきた「乳幼児とのふれあい体験学習」を改善・向上させるために，「ことばによる応答理論」を基盤として「絵本」，と「途上国理解」という要素を組み込んだ新しいプログラムを構築し，授業実践を通してその効果について検証すること，並びにその効果が示されたときは，学校現場や途上国援助を行っているボランティア団体に普及することを設定した。

このような目的を達成するためには，まず「ことばによる応答理論」の意味を理解し，それをどのように授業化するのかという研究が必要になる。さらには乳幼児の成長発達を促す絵本の研究と実物製作，および効果の測定等が要求される。最後に発展途上国の子どもと絵本を通しての文化，人と人とのコミュニケーションの状況について理解し，援助の方向を考えることが要求される。

３．研究の方法

３年間にわたる研究を時系列としてまとめてみると次の通りである。

(1)本研究に必要な家庭科教育・保育学・心理学・開発学等の文献を購入し，精読した。

(2) 家庭科における乳幼児とのふれあい体験学習の先行研究をリサーチし，必要に応じて文献複写を依頼した。以上の作業に基づいて本研究の計画をさらに精緻化した。

(3)本研究におけるふれあい体験学習が依拠する「ことばによる応答理論」について検討し，この理論が家庭科に適用できることを確認した。

(4) 本研究に協力して「ことばによる応答理論」に基づくふれあい体験学習を実践する学校を決定した。実践校の家庭科教師に向けて情報を発信し，また直接訪問して指導して，この理論を習得するように援助した。

(5)ふれあい体験学習を成功させると考えられる絵本について研究し，外国の絵本を収集するのみならず，紙絵本，布絵本，仕掛け絵本などを学生に試作させ、作成までの時間や出来映えを検討した。

(6) 「ことばによる応答理論」と「絵本」を組み合わせた家庭科のふれあい体験学習の中に，発展途上国のこどもたちを理解すると

いう目標を入れ込んでプログラムを作成した。
(7)広島大学附属東雲中学校等において，「ことばによる応答理論」を基盤としたふれあい体験学習の授業実践を行い，それをビデオに収録したものを分析し，また生徒の変化をアンケートで明らかにして，授業のモデル化を図った。
(8)授業モデルを多角的に検討し，よりよき実践のための改善点を研究した。これをもとに，「ことばによる応答理論」，「絵本製作と読み聞かせ」，「途上国の子ども理解」をリンクさせた中・高等学校の家庭科のプログラムを作成した。
(9)改善したカリキュラムにそって授業実践を行い，それをビデオに収録したものを分析し，また生徒の変化をアンケートで明らかにした。
(10)タイでモン族の生活改善支援を行っている佐伯氏に依頼をして、高校生が作成した絵本の読み聞かせを現地の保育園で行ってもらい、幼児の反応を記録してもらった。この成果を高校生に返して、途上国の子どもへの理解を深めた。
(11)研究の最終年には、これまでの研究を拠り発展させて、食育ぬりえ絵本の製作と登場する調理の実習を関連させた家庭科学習の効果について検証した。
(12)研究期間中、いくつかの研究大会等で保育内容の指導助言を依頼されたが、その際には、「ことばによる応答理論」と「絵本製作」を組み合わせて、ふれあい体験学習を構築するように教師を指導した。その結果、広島県においては、「ことばによる応答理論」を含んだふれあい体験学習が普及しつつある。

４．研究成果

研究成果は、「５．主な発表論文等」に示しているように、雑誌論文 5 点と図書 1 点、学会発表１件としてまとめられた。そのうちの４点を時系列で取り上げて、各々の取り組みと成果について概要を記す。

(1)「コミュニケーションの力をはぐくむ『ことばによる応答』―応答的保育理論に基づいた幼児とのふれあい―」（日本家庭科教育学会中国地区会編『いきいき家庭科』＜教育図書発行＞所収、2010）の成果：

宮原和子らが提唱する「ことばによる応答」理論は，保育園や幼稚園で，または家庭で，保育士や親が子どもと応答的なコミュニケーションができるようになるための方法を理論化したものであり，「発問」，「受容」，「過程」という相互に関連した３つの要素をもつ。簡単に言えば，「発問」により上手にたずね，「受容」により上手に受けとめ，さらに「過程」で話をまとめたり，発展させるといった３つの要素を会話のプロセスとして上手に使い，子どもとのことばによるコミュニケーションを深め，展開していくという理論である。

「発問」には，「Yes-No 質問」と 「5W1H 質問」がある。前者は保育士や親の質問に対して，子どもが「はい(Yes)」，「いいえ(No)」で答えることのできる質問である。後者は，「いつ(When)」，「どこで(Where)」，「だれが(Who)」，「なにを(What)」，「どのようにした(How)」，「なぜ(Why)」といった子どもの思考を促すような質問であり，前者より高い応答性をもつ。

「受容」は，子どものことばや行動を保育士や親が受け入れることであり，①「くり返し」，②「確認」，③「承認（同意，肯定)」，④「賞賛」，⑤感情移入」，⑥「制止」，⑦「非承認」がある。このような形で子どもを受容することにより，子どもの自発性が育つといわれている。

「過程」には，①思考を定着させる「明瞭化」，②思考を深化させる「解釈」，③思考を拡大する「示唆」，④思考を発展させる「展開」，⑤思考を転換させる「発想の転換」，⑥思考を前進させる「リード」，⑦物ごとを解釈する力となる「説明」，⑧思考を充実させる「補足」，⑨思考を対比させる「比較」，⑩思考を柔軟にする「命令」がある。

「発問」・「受容」・「過程」のサイクルは、子どもとのコミュニケーションを活発にし，発展させ，特に子どもの思考力を伸ばすといわれている。

ところで、これまで一般的に行われてきた中学生･高校生のふれあい体験学習の多くは，ことばの応答性について意識することなく，幼児と一緒に遊ぶことや，ふれあいをもつことを第一義としてきた。したがって，幼児と接する経験が少ない生徒は，どのように話しかけたり，話を展開していけばよいのか分からず，不安を感じることが多かった。それゆえに、ふれあい体験の事前に行う授業において，幼児との会話を「ことばによる応答」理論に基づいて分析させ，意識化させることを通して，ことばのコミュニケーションスキルを習得させることは意義深い。「発問」により幼児とのコミュニケーションのきっかけをつくり，幼児のことばを「受容」し，話をつなぎ，発展させるために「過程」を使うことを生徒に理解させ，スキルを習得させることにより，新たなふれあい体験学習の可能性がもたらされると考えた。

平成 21 年度に広島大学附属東雲中学校で実践した「ことばによる応答」学習の事後アンケートの結果から，90%以上の生徒が，この授業を通してことばのやりとりに関する新しい知見を得た，と感じていることが示された。

授業の一部を紹介すると、「ことばによる応答」理論を学習させる際には，中学生と幼

児との会話の場面を設定してシナリオを作成させた。設定された場面は，「５歳のマコちゃんは，昨日，家族とディズニーランドに行きました。」というものであった。シナリオは，「ことばによる応答」理論の学習の前と後で２回作成させたが，1 回目と 2 回目の行数を比較すると，ほとんどの生徒が後者の際に行数が多くなっていた。

このことは，幼児とどんな会話ができるのかが十分にイメージできなかった生徒が、「ことばによる応答理論」を学習し，ことばのかけ方や幼児のことばに対する反応の返し方などが具体的にイメージできたことを示している。シナリオの内容を分析してみると，1 回目は「発問」が中心になっている傾向にあったが，2 回目は「受容」や「過程」が数回みられ，「発問」だけにならないようバランスを考えている生徒が増えており，シナリオの質が向上したことが明らかである。

しかしながら，授業後の感想を見てみると，「発問」，「受容」はよく活用できるが，「過程」の活用を難しいと感じた生徒が多かったことが分かる。「過程」については，文脈上とらえにくい部分があるので指導の際の工夫や十分なトレーニングが必要であると思われる。

ともあれ生徒は、「ことばによる応答」を興味深く感じており，85％がこの学習に意欲的に取り組めたと答えている。「ことばによる応答理論」を学習したことにより，今までの漠然とした幼児とのふれあい体験へのイメージが具体的になり，かかわり方や会話のしかたを個々に確認することができたということである。

また，ふれあい体験学習を不安に思う要素が減り，90％以上の生徒が実際の場で「ことばによる応答」の方法を使ってみようと考えていた。しかし、実際に幼児とのふれあいの場で，ことばによる応答」の方法を使った生徒は 60%に留まっていため，今後の研究課題として取り組む必要があると思われた。

(2)「『ことばによる応答理論』に基づいた幼児とのふれあい体験学習の効果に関する研究」(『中学教育』第 41 集、2010）の成果:

本研究においては，広島大学附属東雲中学校の生徒に「ことばによる応答」理論を学ばせ，イギリスの幼児向き絵本を翻訳し，独自のストーリーを作成させた。実際の幼児とのふれあい体験で読み聞かせをし，読み聞かせのあとに「お話お手玉話」を活用し、話の続きを幼児に聞かせた。「お話お手玉」は「ことばによる応答」理論の実践化を図るためのきっかけとして活用し，生徒に製作させた。

本研究で使用したイギリスの絵本は、幼児向きの英語の絵本で，様々な素材が各ページに使われており、手で触れて楽しむことができる。簡単な英語で身近な動物を題材としているため、日本語に訳すことを基調にはするが，それにこだわらず，絵をみて自由にイメージをふくらませ，幼児に読み聞かせる話の内容を考えさせることができるという長所がある。

さらに，絵本の話の続きを生徒が考え，主人公である「ねずみ」を「お話お手玉」として製作させた。お手玉は，日本の伝承遊びの一つであり、歴史と世界各国とのつながりもある。日本では平安時代に遊ばれており，女の子の遊びとして好まれてきた。お手玉を布から作り遊ぶと同時に，行儀作法や昔話が伝えられた。しかしながら核家族化の進行によりお手玉が祖母から孫娘へ伝承されることなく忘れ去られた経緯がある。

お手玉は，すべて手作りでありどこでもだれとでも遊ぶことができる。自由に遊び方も工夫でき創造性のある遊びであるといえる。「お話お手玉」は，そのような忘れかけの伝承遊びの復活を願って作られていることを生徒に知らせ、幼児とのふれあい体験で効果的に活用させることをねらった。

今回は生徒が短時間で製作できるように，形をテトラ型にした。また，幼児が喜ぶデザインになるよう工夫した。この「お話お手玉」をもって保育園を訪問し，グループによる絵本の読み聞かせを行い，中学生と幼児がペアになり「ことばによる応答」を実践した。「お話お手玉」を用いることで，生徒が会話のきっかけを作りやすく「ことばによる応答」の実践が容易になった。

各種のアンケート調査や観察により、今回取り組んだ，質のよい絵本を選択し英語の翻訳をさせ，新たなストーリーを作り，幼児に読み聞かせをすること，そして「ことばによる応答」を学ばせ，「お話お手玉」を使用して，実践の場でこの理論を確かめさせるという流れが生徒の表現力を豊かにするため効果的であることが明らかになった。すなわち，新しい形の絵本づくりと「ことばによる応答」の学習，およびふれあい体験の３つの組み合わせが生徒の表現力を伸長し，双方向のコミュニケーションを深めるという大きな効果を生んだといえる。

(3)「絵本の製作と読み聞かせを通してモンの子どもと結ぶ家庭科授業の研究」、(『広島大学学部･附属学校共同研究機構研究紀要』、第 39 号、2011）の成果：

本研究は，国際理解教育の視点から，ぬりえ絵本製作をとおしてモン族の子どもたちと心を結びあうことを可能とする「家庭基礎」の保育学習をつくることを目的としたものである。平成 22 年度，広島と福山の両附属高等学校の生徒を対象として，次の①～④のような家庭科の授業を実施して，学習効果を測った。

①「針と糸の民」といわれるモン族の生活

について，映像の視聴や刺繍が特徴である民族衣裳の実物に触れることを通して理解させるとともに，モン族の子ども文化の形成を支援することの重要性や，このような支援のためには，絵本が重要な役割を担っていることを了解させた。②広島と福山の２つの附属学校の高校１年生の各２クラスにおいて，モン族の子どもに読み聞かせをすることを前提にした「ぬりえ絵本」を製作させた。ぬりえ絵本の効用は，製作時間を短縮してもバラエティに富んだお話をつくることができるところにある。③出来上がった絵本をモン族の支援団体であるシャンティ山口に委託し，タイのホイプム村において保育園児を対象として読み聞かせを実施してもらい，その際の反応を写真や映像等を通して知らせてもらった。④授業の事前と事後において実施されたアンケート調査等を集計・分析した。

「家庭基礎」の中に組み込んだ「絵本の製作と読み聞かせを通してモンの子どもと結ぶ家庭科の授業」は，2010 年 11 月 18 日(木)～12 月 2 日(木)のうち 5 時間，広島大学附属高等学校 1 年生 2 クラスにおいて実践された。本授業の目標としては，以下の 3 つが設定されていた。(1)子どもの文化を形成するには絵本が重要な役割を担っていることを知る。(2)モン族の子どもたちのための「ぬりえ絵本」を製作する。(3)国際理解教育の視点からモン族の子どもたちと自作絵本を通して心結び合うことを知る。

授業は，①NHK 番組「アジア染織紀行･針と糸の民~ラオス･モン族の刺しゅう」のビデオ視聴，②モン族の生活文化の背景と生活文化，③日本での絵本文化，④発展途上国の子どもたちの生活，⑤発展途上国での絵本の役割，⑥ぬりえ絵本の製作という一連のプロセスで展開した。世界には我々と全く異なる状況のもとで生活している子どもたちがいること，その子どもたちも我々と同じように学習することを望んでいることを理解するために，VTR や Web は効果的であった。

附属福山高校でも同様の授業が実施され、モン族の子どもに向けて 10 冊の手作り絵本が製作された。日本の民話や学校生活を紹介する内容のもの，どこの国の子どもでも関心をもつであろう動物とのふれあいや遊びをテーマにしたものなど，生徒たちはモン族の子どもたちにも理解できるようにと内容を考えて製作した。また，貼り絵や砂絵を利用するなど，より子どもたちに楽しんでもらえるように工夫をした。それぞれの本には生徒たちが興味をそそられたモン族のスカートの布を利用してポケットをつけ，そこに子どもたちへのメッセージカードを入れて思いを伝えた。

この 10 冊の絵本を，モン族支援団体である「シャンティ山口」の事務局長佐伯明夫氏に委託して，タイ国ホイプム村(Barn Hoipum)の保育所で読み聞かせをしてもらった。絵本の読み聞かせの実施日は 2010 年 12 月 24 日であり，現地の保育士で，日本語がわかる女性が，11 歳児から 5 歳児，計 19 人のモンの子どもに対して行った。これを観察していた佐伯氏のレポートには，子どもたちの興味を引くテーマは，自分たちの経験と重なった，理解可能なものであること，またキャラクターとしては，山岳地帯に住むモンの人々となじみが深い動物が受け入れられやすいことが示されている。また，絵本の中に飛び出す部分をつけたり，モン族の刺繍布や紙を貼ることが喜ばれることが示唆されている。

佐伯氏は読み聞かせの風景をムービーカメラで撮影して提供してくださったが，そこには日本人と同じ顔立ちをした，元気のよい，可愛い子どもたちが絵本の読み聞かせを楽しみ，ある時は声を上げて喜んだり，立ち上がって絵本に近づいて来ている姿が映し出されている。今後，高校生にこの映像を見せて，自作絵本のもつ様々な可能性について考えさせたいと思う。

「家庭基礎」は 2 単位であるが，少ない時間を工面して自作絵本を製作させ，保育園などで読み聞かせを行っている事例は数多い。しかし国際理解教育の観点から，発展途上国の子どもたちと自作絵本を媒介として交流を図り，地球市民としての考え方や援助の方向性を見いだすことを視野に入れた教育実践は皆無に近い。この度の研究はその先鞭をつけたものであるが，この実践が可能になったのも，モン族支援に真摯に取り組んでおられる佐伯明夫氏の格別の協力を戴いたからであり，厚くお礼を申しあげたい。

(4)「『ことばによる応答理論』と『ぬりえ絵本制作』を導入した小･中学校連携の家庭科授業に関する研究」(『中学教育』、第 42 集、2011）の成果：

附属東雲中学校においては、これまでの研究から，「ことばによる応答理論」の学習に英語の布絵本や「折り紙のパネル」「お話お手玉」などを加えた授業の構築が生徒の表現力を高めるために効果的であることが確認されている。しかし，「ことばによる応答理論」は，生徒に容易に受け入れられるが，実際にこの理論を適用して幼児と会話することは難しいと考える生徒も少なくないことが明らかになっている。このような生徒は，「ことばによる応答」の３つのプロセスのうち，「過程」に難しさを感じていた。このことから，「過程」に特化した指導の工夫が必要であることが課題となっている。

保育の学習では，今までの自分の成長をふり返り，幼児とまわりの人とのかかわりや自分を支えている家族の役割などを考えさせ、さらに，家庭や地域で異世代間のコミュニケ

ーションをはかることの重要性を理解させたい。そこで、幼児とのふれあい体験に加えて，中学生と年齢が近い小学生との共同作業を授業に取り入れることを考えた。小学生との会話に「ことばによる応答理論」を適用し会話の練習をすることが，「過程」のプロセスの理解を深め，生徒の表現力を高めるために有効であると思われる。

このような考えから、本研究では、中学生と小学生のふれあい体験学習において「表現・コミュニケーション力」を高めるための効果的な指導方法を検討し，その効果を検証することとした。中学生への「ことばによる応答」の授業後，小学校５年生との合同授業を行い，「ことばによる応答」を会話の中で実践させることをねらった。幼児よりも年齢の近い世代である小学生とのふれあいを通して異世代間のコミュニケーションを活発にしようとする意欲を高め，相互理解を深めることを目標とした。合同授業では，中学生４～５人のグループに小学生が３人ずつ加わり，できるだけ個々で会話ができるようにグループを編成した。グループごとに中学生が今まで制作してきた「ぬりえ絵本」を小学生に紹介し，最後の場面を共同制作することについて説明した。教師は、短時間で共同場面が制作できるように、装飾しやすい折り紙や毛糸，テープなどを準備した。また，小学生，中学生それぞれの得意な面を発揮することができるように、中学生に事前に指導した。

小学生との合同授業後のアンケートを見ると，約 50%の生徒は，小学生と「ことばによる応答」を活用して会話をすることができたと答えている。授業前「ことばによる応答」を使おうと思った生徒は 80%以上いたが，実際に小学生を相手に応答を試みたところ，思っていたよりうまく使うことができなかったと感じた生徒が 25%程度いた。このパーセンテージを下げることが課題となっている。本年度の研究から，「ことばによる応答」を学ばせ，英語の「ぬりえ絵本」から，新たなストーリーを作らせ，最後のページを小学生と共同制作すること，そして小学生との交流の場で，「ことばによる応答」を実践してみるという一連の授業が，生徒のコミュニケーションを活発にし，表現力を高めるために効果的な指導法であることが明らかになった。

以上、3 年間の研究成果を概観した。本研究の目的に帰ると、当初に設定された「家庭科で一般的に実践されてきた『乳幼児とのふれあい体験学習』を改善・向上させるために，『ことばによる応答理論』を基盤として『絵本』，と『途上国理解』という要素を組み込んだ新しいプログラムを構築し，授業実践を通してその効果について検証する」という目的は，附属学校の協力を得て、十分に達成できたと考えている。研究期間は満了したが、この研究成果を学校現場や途上国援助を行っているボランティア団体に普及するということについては、未だ不十分であるので、今後も継続して取り組まねばならないと思っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①日浦美智代、柴静子、高橋美与子、一ノ瀬孝恵、佐藤敦子、三根和浪「食育ぬりえ絵本の製作と登場する調理の実習を関連させた家庭科学習の効果」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』、査読無、第 40 号、2012、pp. 89-94.

②瀬川啓子、柴静子「『ことばによる応答理論』と『ぬりえ絵本制作』を導入した小・中学校連携の家庭科授業に関する研究」、『中学教育』、査読無、第 42 集、2011、pp. 67-74.

③柴静子、日浦美智代、一ノ瀬孝恵、高橋美与子、佐藤敦子、三根和浪「絵本の製作と読み聞かせを通してモンの子どもと結ぶ家庭科授業の研究」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』、査読無、第 39 号、2011、pp. 313-318.

④瀬川啓子、柴静子「『ことばによる応答理論』に基づいた幼児とのふれあい体験学習の効果に関する研究」、『中学教育』、査読無、第 41 集、2010、pp. 69-76.

⑤柴静子、日浦美智代、一ノ瀬孝恵、高橋美与子、佐藤敦子、木下瑞穂、高田宏「針と糸の民『モン族』の暮らしと織物の教材化に関する研究」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』、査読無、第 38 号、2010、pp. 155-160.

〔学会発表〕（計１件）

①木下裕子、柴静子「技術・家庭科のふれあい体験学習における『ことばによる応答理論』の導入とその効果について」、日本家政学会中国・四国支部 56 回研究発表会、2009 年 10 月 11 日、高知市高知会館.

〔図書〕（計１件）

①柴静子、瀬川啓子、増田恭子、日浦美智代、高橋美与子、一ノ瀬孝恵、佐藤敦子「コミュニケーションの力をはぐくむ『ことばによる応答』―応答的保育理論に基づいた幼児とのふれあい―」（日本家庭科教育学会中国地区会編『いきいき家庭科』＜教育図書発行＞所収）、査読無、2010、pp.128-137.

６．研究組織

(1)研究代表者

柴　静子　　（ SHIBA SHIZUKO ）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：９０１４１７７０

(2)研究分担者　　なし

(3)連携研究者　　なし